

## ベケット研究会第46回例会 発表要旨

2015年12月12日

龍谷大学

石川太郎 「切断の美学——ベケットとエイゼンシュテイン——」

今発表はベケットの後期戯曲作品『あのとき』を、映画監督エイゼンシュテインのモンタージュ理論の実践として考える。まずはこの戯曲の先行研究を踏まえ自分なりの解釈を示した後で、エイゼンシュテインの理論に移る。そしてこの理論の鍵概念として述べられるモンタージュと象形文字との関係を整理する。その際ベケット自身が実際に読んだ可能性が非常に高い1930年代前半のエイゼンシュテインの英訳された論文を読み、これらの発表当時の状況を出来る限り細かく検証する。結論として、『あのとき』における映像とテキストの関係をモンタージュ理論の枠組みから考え、この作品が持つ、エイゼンシュテインが述べる映画的特徴を明らかにしたい。

菊池慶子 「ベケットのヴァン・ヴェルデ批評における「見ないこと」について」

ベケットが1945年から49年にかけて発表した画家のヴァン・ヴェルデ兄弟をめぐる三つの批評（「ヴァン・ヴェルデ兄弟の絵画、あるいは世界とズボン」、  
「障害の画家」、  
「三つの対話」）は、絵画のみならずベケット自身の創作にも関わる芸術論であると言える。批評の中でベケットは兄弟が「見る事ができない」画家であると大胆に述べているが、特に視覚に問題を抱えていたわけではない二人を彼はなぜこのように評したのか。本発表では三つの批評の読解を通して、ベケットの芸術観における「見る事ができない」あるいは「見ない」ことの意義を探ってみたい。